

## 1 研究主題

### 自己の生き方についての考えを深める学びの創造

## 2 研究主題について

### (1) 研究総論との関連

本校研究主題は「ともに学び、学び抜く子供-非認知能力に注目した授業を通して-」である。「ともに学び」とは、人と関わり合いながら、主体的に学ぶ子供である。自分の考えを友達に伝えること、友達の考えを聞くこと、友達の考えと比べること、友達と協力することなど、学習活動に取り入れることで、教科の学びを深められると考えている。「学び抜く」とは、困難な課題に対してもあきらめずに向かい合い、試行錯誤しながら取り組んだり、解決策を考えたりしてやりとげようとする子供である。道徳科の目標である「よりよく生きるための基盤となる道徳性」を養うためには、道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることが学習指導要領に示されている。そこで道徳科の授業では、「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考える」という「道徳的価値の自覚」を通して、子供がこれからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする願いや思いを深めていく学びの実現を目指す。このような学びの積み重ねが子供の道徳性を養っていくと考えている。

### (2) 道徳科における「意欲」「粘り強さ」について

自己の生き方についての考えを深める学びの過程には、子供が以下のような「意欲」「粘り強さ」を発揮している姿が現れると考えている。

「意欲」	道徳的価値について自分との関わりで考えている姿
「粘り強さ」	これからの生き方について願いや思いを深めている姿

「自分との関わり」については次のように考えている。

「人間としてよりよく生きる上で大切な道徳的価値を、自分の事として感じたり、考えたりすること。これまでの経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせながら考えること」

子供が道徳的価値について自分との関わりで考えることで、自分自身を道徳的価値に照らし合わせ、現在の自分がどのような状況にあるのかメタ認知することができると考えている。つまり、子供が「道徳的価値の自覚」を深めているということである。

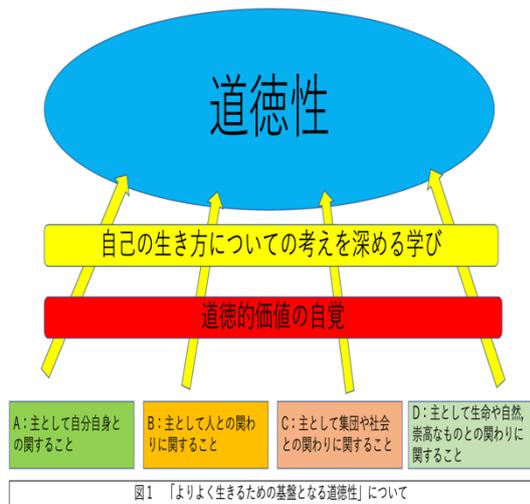
「願いや思いを深めること」については次のように考えている。

「道徳的価値は自分にとってどのような意味があるものなのか、また、どのようにいかしていけるものなのか、これからの自己の生き方について考えること」

道徳的価値の自覚を通して、自身の状況をメタ認知する、そしてこれまでの生活及びこれからの自分の生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする願いや思いを深めることが「よりよく生きるための基盤となる道徳性」を養うことにつながる。

### (3) 道徳科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の姿について

道徳的価値について自分との関わりとして考え、様々な考え方や感じ方に触れることを通して、自己の生き方への願いや思いを深める姿
---



道徳科では、以上の（１）（２）から「ともに学び、学び抜く姿」を自分との関わりで考える姿、様々な考え方や感じ方に触れることを通して、自己の生き方への願いや思いを深める姿と考えている。図１で示したように道徳的価値の自覚、そして自己の生き方への願いや思いを深める学びを通して、「よりよく生きるための基盤となる道徳性」を養うことができると考えている。子供が今後、様々な場面、状況において、よりよく生きるための適切な行為を考え、選択し、実践できることが大切である。上記の子供の育成を目指し、上記の「ともに学び、学び抜く子供」の姿を設定した。この姿の実現に向けて、道徳科授業を実践していく。

### 3 研究内容「ともに学び、学び抜く子供」を育成するための授業について

#### (1) 1・2年次の研究について

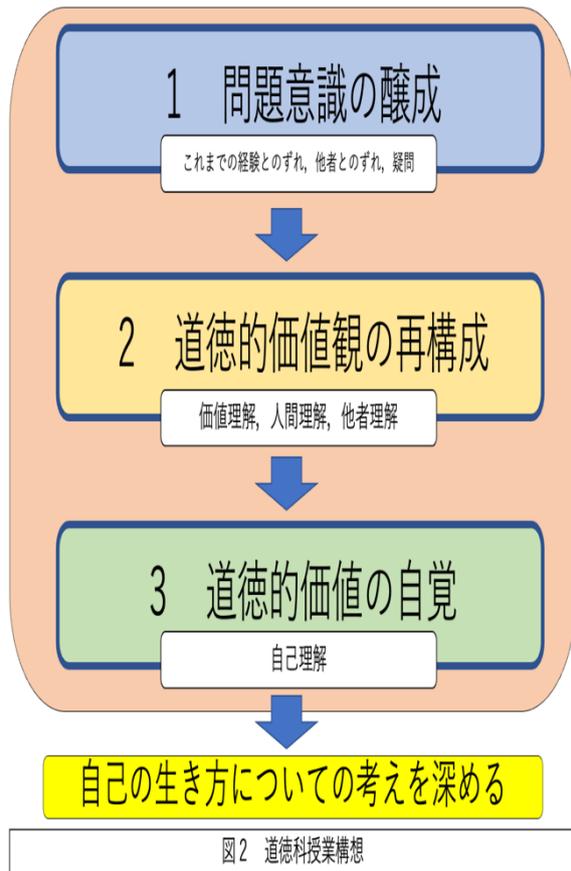
1・2年次の成果と課題は表1の通りである。1年次では子どもの道徳的問題に対する問題意識の醸成にフォーカスし、実践をした。主に授業の導入部分における教材提示の工夫、授業の展開部分における教師の中心発問、問い返しを子供の学びの文脈に沿わせることで、自分との関わりで考えられるようにした。2年次では、道徳的価値観の再構成にフォーカスし、実践を行った。その軸となったのがICT活用である。子供が中心発問について自分の考えを心の数直線に示した。子供の考えを相互参照できるようにしたことで、子どもが「違う考えの友達の話聞いてみたい」「聞きに行ってもいいですか」と動き始める姿が見られた。同じ考えの友達、違う考えの友達と交流することで、道徳的価値の理解を深めると同時に、道徳的問題に対して多面的・多角的に考えるためのツールとなっていたと言える。一方で、交流の深まりについては、意見発表に終始する子供の姿が見られ、ともに学ぶという部分では課題が残る。条件や対象が異なる場合はどうなるのか、違う立場から考えたら同じことが言えるのか、子供が道徳科特有の見方・考え方を働かせながら、多面的・多角的に考えを深めることができる交流の仕方など、学び方を獲得していく必要がある。また、教師が用意した中心発問を考え、教師の問い返しでさらに掘り下げるといふ授業デザインで1・2年次は授業を実践した。教師がイニシアチブを握る時間が多く、お客さん状態になってしまっている子供の姿も見受けられたことは事実である。これらの子供の姿から粘り強く学習に取り組み、学び抜くという点に課題が残った。3年次は学び抜くという点に手立てをフォーカスして授業を構想する。

表1 これまでの研究における成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入では日常生活のある場面について想起することで、「同じようなことがよくある」「難しいよね」と自分との関わりで考える姿が見られた。</li> <li>・「それは分かるんだけど、僕はこう思うよ」「その考えはなかった」と交流を通して、自分の考えを明確にする姿や考えを広げる姿が見られた。</li> <li>・「心の数直線」を活用することで、これまでの経験等を想起しながら自分の心の動きを示す姿が見られた。</li> <li>・端末で他者の考えを参照することで、「え、どうして、自分とは逆なのだろう」「理由を聞いてみたい」「話し合ってもいいですか」と交</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時で考える内容が示されていないため、ゴールイメージをもつことが難しかった。学びに向かうためには、学習の見通しが必要であった。</li> <li>・端末の操作技能がハードルとなってしまい、自分の考えを示す、友達のを他者参照することができずに時間が経過してしまった姿が見られた。</li> <li>・端末の画面上で考えを共有できているように見えても、何となく見ている状態で情報の収集や整理に課題が見られた。</li> <li>・教師によって設定された中心発問、問い返しなど教師を介して考えを深めていく姿が見られた。子供の学びの文脈に沿</li> </ul>

<p>流相手を選びながら、考えを共有する姿が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・よさを問う発問で、様々な状況や立場、対象から多面的・多角的に考える姿が見られた。</li> <li>・ねらいに迫る考えや経験、その時の感じ方や考え方を問い返すことで「そんな時もあったな」「人によって違うな」と道徳的価値観を再構成する姿が見られた。</li> </ul>	<p>った問い、ゆさぶりが必要であった。教師の役割について整理する必要がある。</p>
--	---

(2) 道徳科における「意欲」「粘り強さ」に働きかける授業について



1・2年次と同様に図2の道徳科授業構想で授業を行う。授業を通して目指す姿は、子供が自己の生き方についての考えを深めることである。

1の過程は、これまでの経験とのずれ、他者とのずれをうむことで、自分との関わりで道徳的価値について考える姿を期待したい。醸成された問題意識が粘り強く学び抜く心のエネルギーとなる。

2の過程は、子供が自己、他者との対話を通して、価値理解、人間理解、他者理解を深めることで子供が道徳的価値観を再構成する姿を期待したい。単なる考えの発表に終始するのではなく、自分と他者の考えを比較することで、違いや共通点を整理するなど、多面的・多角的に考えを広げられることがその後の道徳的価値の自覚につながる。

3の過程は、子供が道徳的価値に照らし合わせて自分がどのような現状にあるのか自己理解することで道徳的価値の自覚を深める姿を期待したい。学習の振り返りを通して、これまでの経験等を想起しながら、これからの生き方への思いや願いを深めることができる。

(3) 3年次の具体的な指導方法の工夫、手立てについて

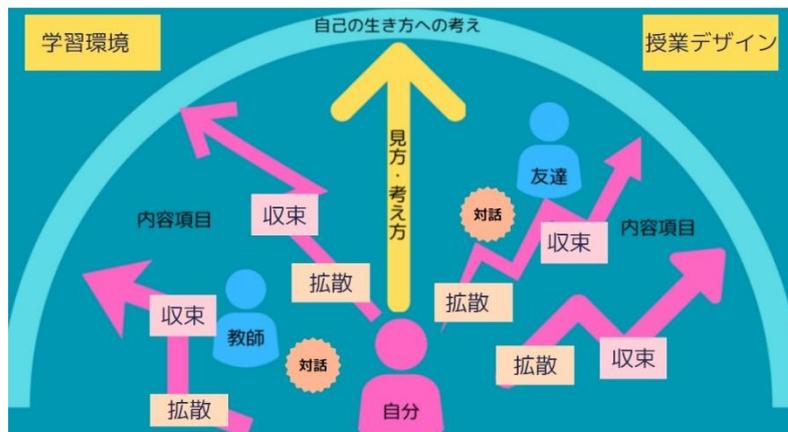


図3 自己の生き方への考えを深める学び方のイメージ

1・2年次の課題となっている「粘り強さ」については、図3をもとに学習環境、授業デザインを構想し、アプローチしたい。自己の生き方への考えを深める学びの過程には、子供の多様な

学び方が存在する。子供は自己との対話、他者との対話を通して、道徳的価値についての自分の考えを拡散させたり、収束させたりしている。拡散、収束を何度も繰り返す子供や一度だけの拡散、収束で道徳的価値観を再構成する子供、自己の生き方への考えを深める学びの過程は多様である。子供が多様な学び方を発揮しながら自己の生き方についての考えを深めることができるように、学習環境や授業デザインを構想することで子供は自己調整を働かせながら粘り強く学び抜くことができると考えている。「意欲」「粘り強さ」に働きかける授業づくりのための手立てとして、次の4点を設定する。

### ①導入と終末の連動

導入と終末で同じことを問うことで、子供が学習の見通しをもって粘り強く学び抜けるようにする。2年次の授業実践では、「最初はきまりを守ることは人に嫌な思いをさせないと思っていた。授業をして、自分の気持ちもモヤモヤするということがわかった。」というように価値観の質的な高まりや深まりを自分の言葉で語る子供の姿が見られた。導入と終末で同じことを問うことで授業の流れに一本筋が通り、子供の「学んだ」感が強まると考えている。

### ②問いの個性化

子供の視点から学習を見つめると、道徳科においては問いが重要である。1・2年次の課題を踏まえると学習課題が子供の考えたい問いとなっているか子供の視点から検討する必要がある。3年次では、子供が創った問いを学習課題と設定することで子供が考えたい問いを自己選択肢しながら追究可能な学習過程をデザインする。学習課題の形成の仕方については、複数時間で小単元を組み、学習集団全体の合意形成を経て問いを創る、または、子供が創った問いを整理、分析し、いくつかの学習課題として形成するなど子供の実態に合わせて検討、実践していく。

### ③学習活動の複線化

図2の道徳的価値観の再構成の過程において学習活動を複線化することで、子供の問題意識、多様な考え方、理解の仕方などに弾力的に応え、それぞれの学び方に対応できるようにする。また、複線化された学習活動の中で生じたずれ（これまでの経験とのずれ、他者との考え方・感じ方とのずれ）について、教師が問い返したり、揺さぶりをかけたりすることで、多面的・多角的に考えを深められるようにしたい。子供が複線化された学習活動の中で様々な考え方・感じ方に触れるという面でICTを活用すること有効である。ICT活用で可能となる共同編集、他者参照、相互評価を通して、子供が自己調整を働かせながら学べるようにする。

### ④学び方のフィードバック

子供が道徳科特有の見方・考え方を働かせながら意欲、粘り強さを発揮して学習を進めるためには、見方・考え方を含めた学び方を子供が獲得していくことが必要である。そのためには子供が学んでいる姿を教師がフィードバックし、価値づけることで学び方を共有していくことが重要である。例えば、問いについて考える際には「今まで同じようなことはなかったか」これまでの生活経験を想起する、交流する際には「逆の立場で考えたら同じことが言えるのか」立場を変えて考える等、学び方を価値づけ、共有する。いずれ子供は獲得した学び方を活用し、自己調整を働かせながら学び抜けるようにしたい。事前に教師が道徳科特有の学び方を整理しておき、意図的にフィードバックしていくことで子供の学び方を鍛えていく。

〈引用文献・参考文献〉

- ・文部科学省(2018)「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」
- ・中央教育審議会『道徳に係る教育課程の改善等について(答申)』平成26年10月
- ・浅見哲也(2021)『道徳科授業構想グランドデザイン』明治図書
- ・浅見哲也 安井政樹(2023)『道徳授業の個別最適な学びと協働的な学び』明治図書
- ・奈須正裕(2021)『個別最適な学びと協働的な』東洋館出版社
- ・奈須正裕(2023)『個別最適な学びの足場を組む』教育開発研究所
- ・奈須正裕 伏木久始(2023)『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』北大路書房